

第4室 「近世の工芸」展示解説

N-93 片輪車蒔絵螺鈿手箱（かたわぐるままきえらでんてばこ）

平安時代に作られた国宝・片輪車蒔絵螺鈿手箱（H-4282）を江戸時代に模造した作品です。原品と意匠や加飾法に若干の相違がありますので、原品から直接ではなく、模写図を写した可能性も考えられますが、蓋表（ふたおもて）の甲盛（こうも）りや側面の胴張（どうば）り、稜角の角丸（すみまる）など、器形は平安時代の気分を伝えています。なお、原品は手回り品を入れる手箱ではなく、経巻を入れる経箱と考えられます。

N-64-附属 五大明王鈴付属箱（ごだいみょうおうれいふぞくはこ）

N-13-附属 梵網経付属箱（ぼんもうきょうふぞくはこ）

法隆寺は元禄7年（1694）に伽藍（がらん）修理の資金を調達するため、江戸・両国の回向院（えこういん）で寺宝の出開帳（でがいちょう）を行いました。その際に徳川5代将軍綱吉（つなよし）の生母・桂昌院（けいしょういん、1627～1705）によって、これらの宝物収納箱が寄進されました。いずれも黒漆塗りで、蓋（ふた）に徳川家の三つ葉葵紋（みつばあおいもん）や桂昌院の里（さと）である本庄家の繋ぎ九つ目紋（つなぎここのつめもん）を金蒔絵（まきえ）で表しています。

N-299・296・297 居箱（すえばこ）

僧侶（そうりょ）が三衣（さんね）や法具など法会（ほうえ）に必要な品々を入れて傍（かたわ）らに据え置く箱で、説相箱（せつそうばこ）ともいいます。これらの居箱は木で作った箱に金銅（こんどう）板を貼って装飾を加えています。居箱（N-299）には側面に輪宝（りんぼう）をかたどった金具が付けられており、寛永5年（1628）の銘があります。

N-294 花台（はなだい）

ケヤキ材製で、甲板の右隅に親子の亀を金高蒔絵（たかまきえ）で表し、銀製菊唐草文（きくからくさもん）の隅金具を四隅に打っています。側板には花菱入りの七宝繋ぎ文（しっぽうつなぎもん）を透かし、刳形（くりがた）のある隅足を四隅に付けています。

この花台は、江戸時代に仙洞御所（せんとうごしょ）より法隆寺西円堂の峯薬師（みねのやくし）に奉納されたものと伝えられ、花瓶（かへい、N-293）の台として用いられたと考えられます。

N-292 花瓶（かへい）

この花瓶は、花台（はなだい、N-294・295）とともに江戸時代・文化年間（1804～1818）に仙洞御所（せんとうごしょ）より法隆寺西円堂の峯薬師（みねのやくし）に奉納されたものと伝えられます。高台（こうだい）の上に膨（ふく）らんだ胴とラッパ形に開いた口を付け、頸（くび）の部分に表された剣先形（けんさきがた）の内に渦文や波文を表すなど、その器形は中国の古代青銅器・尊（そん）を意識しています。江戸時代末期の一時、蠟型鑄造（ろうがたちゅうぞう）で中国古銅器の形を模した銅器の製作が流行しますが、本品もそうした風潮の中で作られたものとみなされます。

N-131 御所人形（ごしょにんぎょう）

御所人形は、江戸時代の享保年間（1716～34）頃より京都の公家（くげ）の間で好まれた、頭が大きく丸々とした裸身の幼児の人形です。この人形は胸に紅縮緬刺繍（べにちりめんししゅう）の腹掛けを着け、頭に赤い牡丹（ぼたん）の花を飾った金冠を戴き、右手には軍配（ぐんばい）を持っています。左足を折り、右足を投げ出すポーズは「狂い」と呼ばれ、冠・軍配とともに天下取りの姿を表しています。文化年間（1804～18）に仙洞御所（せんとうごしょ）から法隆寺西円堂の峯薬師（みねのやくし）に奉納されたとの伝承があります。

N-100 蜻蛉螭螂蒔絵印籠（とんぼかまきりまきえいんろう）

N-101 寿字蒔絵印籠（じゅじまきえいんろう）

印籠は携帯用の薬入れで、紐の端に付けた根付（ねつけ）を帯の上に掛け、腰に下げました。時代が下がるにつれ装身具としての要素が強くなり、小さな器体に技巧の粋（すい）を集めたものが多く作られました。蜻蛉螭螂蒔絵印籠は、研出蒔絵（とぎだしまきえ）や高（たか）蒔絵により、精細に文様（もんよう）を描いています。作者の塩見政誠（しおみまさなり、1646～1719）は京都に住み、研出蒔絵の名工と称（たたえ）えられました。寿字蒔絵印籠は、金・銀の研出蒔絵に朱・茶の色粉を交えて様々な字体の「寿」字

を表しています。作者の田村寿秀（たむらひさひで）は東溪（とうけい）と号し、19世紀前半に京都で活躍しました。